



Matthew Arnold Abstract Case Auden Group "It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife." Jane Austen A-chain Adequacy Admissible Derivation New Criticism Mikhail Bakhtin Agreement System Argument Structures Articulatory-Perceptual System Asymmetric C-command Attraction "The weak in courage is strong in cunning." "Eternity is in love with the productions of time." William Blake Bare Output Condition Bare Phrase Structure Theory Bronte Sisters Barriers Binding Theory "Ignorance is not innocence but sin." Robert Browning Brain Wilkie Collins Case: Categories Chains Checking Theory Cognitive System Samuel Becket Jonathan Culler Competence in Language Complete Functional Complex Computational Complexity Conceptual-Intentional System "Give the people a new word and they think they have a new fact." Willa Cather Condensation "In sooth, I know not why I am so sad." Thomas de Quincey Charles Darwin "I have a great many ideas which I have not attributed Morphology Theory Economy Principles E-language Empty Categories Scott Fitzgerald New Historicism Michel Foucault Implied Reader Formal Features Full Interpretation Northrop Frye William Faulkner Gender Theory Generative Grammar Elizabeth Gaskell George Gissing Thomas Hardy Head-complement Nathaniel Hawthorne "A man ought to take a lot of punishment to write a really good book." Ernest Hemingway Inclusive-ness Condition Interfaces Interpretability Intervention in Locality Henry James Samuel Johnson James Joyce "Never confuse movement with action." Ernest Hemingway Language e-Faculty Labels Levels of Representation Lexicon Linearity Merge Operation Herman Melville Minimalist Program Minimality Condition Modules of Language John Milton Narrator Narrow Syntax Numeration Null Subject Language Misogyny Restoration Drama Oxford Movement Operator Movement Overt Cyclicity and Extension Condition Parameters Alexander Pope Thomas Pynchon Performance vs. Competence Periphery of Languages Primary Linguistic Data Phases Projection Principles Relativized Minimality R-expressions Christina Rossetti Semantic Bootstrapping Edmund Spenser Wallace Stevens Spell-Out Operation States of Language Faculty "All the world's a stage, and all the men and women merely players." "O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo?" "So wise so young, they say do never live long." William Shakespeare Syntax Thematic Relations Derrida's Deconstruction The Death of the Author Postcolonialism Postmodernism Poststructuralism Post-structuralist Rules Lost Generation American Renaissance Typology Uniformity Unmarkedness Vacuous Quantification Variables William Wordsworth Word formation Virginia Woolf Oedipus Complex Jazz Age The Metaphysical Poets pro Conceptual Necessity Perfection Methodological Naturalism

In sooth, I know not why I am so sad.

in sooth

know

not

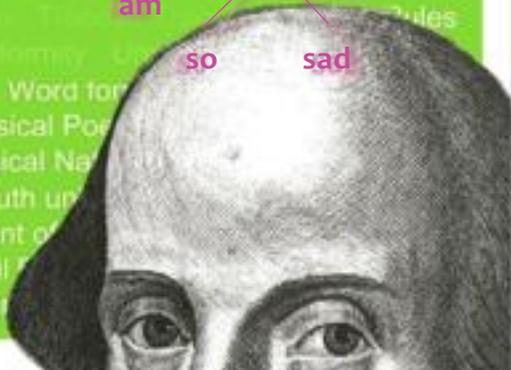
know

why

am

so

sad



[[1696/97: Shakespeare, W. The Merchant of Venice, Act I, Scene I]]

英語英米文学研究室

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/english>

はじめまして

「英語英米文学」専修課程、略して**「英文」**、に(ほんのちょっとでも)関心を持っていただいた皆さんに、英文科とはどんなところか、英文科での学生生活はどんなものになるのか、イメージを膨らませてもらえるように、ささやかな冊子を用意しました。

「英文」でできることや、**「英文」**にいる人のことなど、簡単に解説していきます。

といってもまず、そもそも「英文」に行っても何をするのかわからない、という方も多いようです。



正式名称である**「英語英米文学専修課程」**の名の通り、英文の学生は各々の関心によって**「英語学」・「英文学」・「米文学」**の三つの専門に分かれます。英語ということばの仕組みそのものに興味のある人、英語で書かれた文学作品に興味のある人などが、広く緩い繋がりで集まった学科です。「英語に関わる学科」くらいに思っていればだいたい正解。

学科イベントも、たくさんというわけではないですが、クラーク先生と楽しむランチタイム**「クラーク・ランチ」**(毎週水曜日お昼)などがあります。



イギリス文学

- *Hamlet* (1604)
- ☆ *Paradise Lost* (1667)
(『失樂園』)
- ◇ *Robinson Crusoe* (1719)
(元祖『小説』?)
- ☆ William Blake (1757-1827)
(「虎よ! 虎よ!」)
- ◇ *Pride and Prejudice* (1813)
- ◇ *Frankenstein* (1818)
- ◇ *Wuthering Heights* (1847)
(『嵐が丘』)
- ◇ *Alice's Adventures in Wonderland* (1865)
(卒論で児童文学を扱う学生が増えています)
- ◇ *A Study in Scarlet* (1887)
(シャーロック・ホームズシリーズ第1作)
- ☆ *The Waste Land* (1922)
- ◇ *Ulysses* (1922)
(『ユリシーズ』、20世紀最高の小説と言われる)
- ◇ *Mrs Dalloway* (1925)
- ◇ *1984* (1949)
- ◇ *The Lord of the Rings* (1954-55)
- *Waiting for Godot*
(仏 1953; 英 1955)
- ◇ *Disgrace* (1999)
- ◇ *Never Let Me Go* (2005)
(ノーベル文学賞でおなじみの)

アメリカ文学

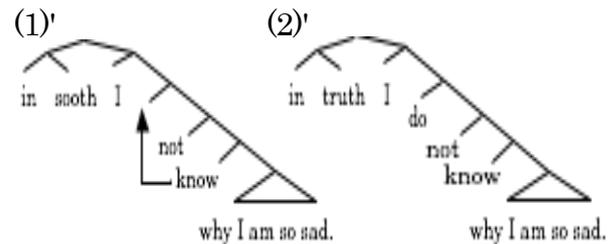
- ◇ “The Murders in the Rue Morgue” (1841)
(史上初の探偵小説)
- ◇ *Moby-Dick* (1851) (『白鯨』)
- ☆ Emily Dickinson (1830-1886) (引きこもり詩人)
- ◇ *Adventures of Huckleberry Finn* (英 1884; 米 1885)
(トム・ソーヤーとハックルベリー・フィン)
- ◇ *The Turn of the Screw* (1898)
(『ねじの回転』、世界最恐のホラー(?)小説)
- ◇ *The Great Gatsby* (1925)
- ◇ *The Maltese Falcon* (1930)
(元祖ハードボイルド小説)
- ◇ *Light in August* (1932)
- ◇ *Gone with the Wind* (1936)
(『風と共に去りぬ』)
- *A Streetcar Named Desire* (1947)
- ◇ *The Catcher in the Rye* (1951)
- ◇ *Lolita* (1955)
- ◇ *Gravity's Rainbow* (1973)
- ◇ *What We Talk About When We Talk About Love* (1981)
(村上春樹さんの翻訳で有名)

○: 演劇、☆: 詩、◇: 小説

英語学

- (1) In sooth, I know not why I am so sad.
- (2) In truth, I do not know why I am so sad.

シェイクスピア時代の英語(1)と現代英語(2)とでは、いくつか違う点があることに気が付きましたか。



仮に、動詞(上例では *know*)はどんな言語でも *not* のような否定語の影響下にあるとします。するとシェイクスピア時代には動詞が *not* の前に「移動する」けれど、現代では「移動しない」という相違が見えてきますね。しかし現代英語でも、この「移動先」は決して無くなったわけではなく、そこには *do* が現れていることが、表紙の樹形図からも見て取れます。

これは「人間のことばの一般性質」の解明を目指す「生成文法理論」からの視点です。こうした視点から言語を眺めると、現代ドイツ語にも、シェイクスピア時代の英語で垣間見たのと同じような「移動」が見えてきます。(‘ ’内は現代英語による逐語訳)

- (3) Ich weiß nicht, wann er kommt.

‘(lit.) I know not, when he comes.’

人間の言語に普遍的な仕組が脳内に作り出す階層構造の中で、ある文法(例えば動詞上昇)が働いたり働かなかったりするという考え方をとれば、英語の史的变化や他の言語との関係に違った興味が湧いてくるかもしれません。

卒業論文

英文に進学した学生が最終的に一体何に興味を持っているのか、それは、どんな卒業論文を書いたかを見ればわかるかもしれません。

英語学、英文学、米文学にだいたい専攻がわかれ、専修課程としての必修科目をどの専攻からも履修することをのぞけば、学生のみなさんはだいたいのところ**好みの専攻の勉めに集中**できるはずです。このとき、誰々先生のゼミに所属、といった小枠は存在しませんので、自由に自分の方向をさだめることができます。そうして行きつ戻りつ、しだいに**思いさだめたトピック**や作品について卒業論文を書くことが、英文科ライフのいわばクライマックスとなってほしいと思います。例えば、**最近のテーマ**にはこんなものがあります。

【演劇】

ジェイムズ朝におけるシェイクスピアのローマ悲劇

【詩】

「これは世界に向けたわたしの手紙」：エミリー・ディキンソンの書簡詩
W・B・イェイツにおける声の機能

【イギリス小説】

『荒涼館』における終わりの感覚

【アメリカ小説】

『グレイト・ギャツビー』における父・子の葛藤

【英語学】

英語・日本語における形容詞の修飾構造

分量は **30 ページ**以上。もちろん、**英語で**書きます。専門の近いスタッフや助教が書き方や参考書目などについて積極的に相談に応じてくれます。

英語で論文なんか書けるかなと思った方は「授業科目」のページも見てみてください。

英文のまじめな紹介

英語学は、一時期の言語構造（現代英語や古英語）の解明をめざす共時的研究と、言語変化の諸相を研究する歴史的研究の分野を含む。各々がさらに様々な分野にわかれるが、すべての基礎として、**言語の一般的性質**・仕組みについて正確な理解をもつ必要がある。一般言語理論と個別言語の実証的研究は相互依存関係にあり、両者あいまってはじめて、実質的な興味ある成果が得られるからである。したがって授業では、英語の詳細な事実と、その理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。

一方英米文学は、**範囲が定めがたいほどひろい**。その中心となる英米の文学がスタッフによってだいたいカヴァーされており、授業は以下にもうかがわれるように、従来から**精読**を旨としている。だがその後、たとえば英米以外の英語圏の文学を、卒業論文などで学生諸君が自主的に研究することは支援されるし、児童文学、大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、**美術や音楽**と文学との諸関係などについても、興味をひろげてもらってかまわない。後二者については、例年卒論で取り上げる諸君があらわれるし、少しずつ授業で扱っている。また、言うまでもなく、具体的な作品の読解を重視する点で英米の地域研究とは異なるけれども、**社会的、文化的アプローチ**は当然歓迎される。英米のものを主眼とした、**文学理論・批評理論そのもの**の研究ももちろん可能だ。要するにほとんど何をやってもよいのであり、スタッフはそれぞれの関心に応じて主だった作家・作品を扱うが、それをきっかけに自由な途をひらく、進取の気性こそここでは多とされる。

教員の紹介

後藤和彦教授

アメリカ文学、特にアメリカ南部の小説を主たる研究対象としている。南部は、自由と平等の国アメリカにあって、戦争まで起こして奴隷制度を守ろうとした土地柄。その土地に、戦争の敗北からほぼ半世紀を経た20世紀前半、突如独特の文学が花開き、すぐれた作家が陸続と登場、この現象は「南部文芸復興(ルネッサンス)」とも称されるが、それはただの偶然だったのか。「偶然」といえば、無論それまでのこと。だが、もしもそれが偶然ではなかったなら、つまり「南部文芸復興」の百花繚乱が長い雌伏のときを経て訪れた南北戦争後の「戦後文学」の暴発なのだとすれば——この「もしも」が私の研究の起点にあり、私の研究をいまだに駆動している——ならば、一般に、戦争と、いや戦争の敗北と文学との関係はいかなるものか、と自然に問いが繋がっていったのは、やはり私が敗戦国日本に生まれたからだろうか。こうして戦後文学としての南部文学の秘密を探るべく、これとはあまりに違って見える祖国の戦後文学を横目で見ているうち、昨今ではむしろ南部文学の側を横目で見ているような気もしており、授業中にそのあたりを口走る可能性は高いが、アメリカ小説をできるだけ正しく深く読む努力をするというのがすべての建前であることは言うまでもない。

新井潤美教授

専門分野はイギリス文学と比較文学。主な関心はイギリスの「階級」の概念と文学における表象であり、特にイギリスの小説と18世紀以降のイギリスの演劇、文化を研究対象としている。「階級」との関連で、「郊外」「教養」「教育」「消費文化」「観光」「他者」といったテーマをも扱っている。また、文学作品の映像化を中心としたアダプテーション研究、イギリス文学における「日本」の表象、そして最近ではイギリス文学、文化におけるエスニック・マイノリティの表象と受容の研究も行っている。

渡辺明教授

統語理論が専門。高度な理論的判断がどのような形でデータの分析に反映されるかということに特に興味がある。最近では移動現象に焦点を当てて理論開発の研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、(素人がよく誤解するように)一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出していかかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

阿部公彦教授

現代英米詩を主要研究対象とする。英語詩における〈伝統〉の持つ呪縛力に敬意を払い古典的な作品をも考察対象とするが、出発点はあくまで現代であり、それ故「今、この現代世界において、わざわざ詩が書かれることに意味があるのか?」、「このような環境で我々が詩を読むとはいったいどういうことか?」、「どうして詩について語る必要があるのか?」といった学生諸君が当然持つ(べき)であろう疑問と関わり合うような授業展開が理想である。また刺激的な作品世界を体験してしまったときの、「ああ、何かこれについて語りたい。何とかしたい」という、ムズムズするような衝動にはけ口を与えうる批評の可能性を探るのも大きな目標のひとつである。

諏訪部浩一 准教授

アメリカの 20 世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって 19 世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しいスタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

中尾千鶴 准教授

専門は生成文法統語論。言語における文法規則の言語間変異を、主に日本語と英語の比較を通して探っている。特に、文における語の移動や語の削除(省略)の規則について、それぞれの構文がどのような場合に認可されたりされなかったりするのかを言語ごとに考察している。また、子供がどのようにそれぞれの母語の規則を習得するか、子供の文法と大人の文法がどのように異なっているかと言った言語獲得に関する問いにも興味がある。

CLARK, Stephen 客員教授

My original topic of research was on William Blake and Romantic poetry, which has gradually expanded to include

English literature from the 16th century and Shakespeare through to contemporary novels, poetry and film. Other more recent interests include post-colonialism, gender studies, new historicism, narratology, and Anglo-American and European critical theory, and also more specifically on the reception history of Blake and other Western authors in Japan.

卒業に必要な単位

英語英米文学専修課程

卒業に必要な単位 76単位

専修課程修了に必要な単位

48単位



*平成28年度以降の進学者の場合

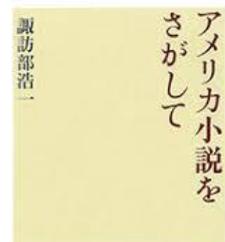
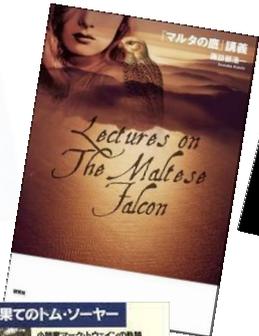
- ・「概説」「概論」「特殊講義」の授業は、基本的に講義形式です。
- ・「演習」の授業は、いわゆる「ゼミ」形式です。担当者が発表をしたり、授業内での積極的な発言や活発なディスカッションが求められます。成績評価はレポートが中心です。
- ・「アカデミック・ライティング」「英語後期」「英語表現法」の授業では、英語運用能力（論文の書き方、英会話など）の向上を目指します。多くの授業は、英語母語話者の講師等により英語で行われています。

進路状況

過去5年では、金融、保険、証券、製造、出版、新聞などの業界に進む学生が多いようです。

ほか、毎年1~2割程度の学生が大学院へ進学しています。

(具体的な話は、英文研究室ブースにいる先輩方に聞いてみてください。)



アメリカ文学研究の
新たな幕開けを予感させる
直球勝負の作品論
著者の半生を語る
対談エッセイ・観戦記も収録



英文研究室(平日 10:00-17:00 開室)

場所:文学部3号館5階

TEL:03-5841-3830

E-MAIL: eng@l.u-tokyo.ac.jp